

Title	高野正巳著「近松とその伝統芸能」
Sub Title	Chikamatsu and Japanese literature in the Edo era (in Japanese), by Masami Takano
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.119- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 高野正己著「近松とその伝統芸能」

檜 谷 昭 彦

序論によれば「主として近松の作品を鑑賞しながら、その周辺を探ることによって、江戸演劇や江戸文学の特質、さらには日本演劇の伝統を知ろうとするもの」という。論の構成は、近松とその時代・演劇の本質・江戸演劇の社会的背景・近松以前の芸能、の四章を前置きとして本論の「近松門左衛門」に入り、その歌舞伎狂言と浄瑠璃作品、加賀掾及び義太夫との関係を叙した後、「時代武道物考」「世話物」の二章に於て、主として一五篇の作品鑑賞に焦点を当てた詳細な考察を行ない、紀海音との比較、近松の芸能論研究をへて結論に至る。以上の標題の論考に附するに、武道狂言・藤十郎の演劇論・元禄歌舞伎・近松と西鶴など七篇の附属論文が本論を補ない更に小論七篇及び英文の論文一篇に多様な問題提起を試みた意欲的な研究成果の結集である。近松研究に又ひとつの大きな業績が積みれたことを喜びたい。

本書はその意図する所、従来の美学的文学的研究にも文献学的研究にも組せず、過去の成果を前提とし作品自体の内部徴証を明確化しつつ、劇作家近松を今日に於て顕在化せんとするにあると思われる。ところで、著者が「義理」の解釈に援用する所論の著者森修氏は、〈演劇研究会〉の「近松の研究と資料第一」に芸能環境としての演劇史的研究を提唱し、それは「日本文学」(昭三八・一二)に諏訪

春雄氏が論じた芸能共同体史の構想につながって、文献学的基礎的研究を十分にふまえた近松の作家論への志向を明確にしている。対するに本書が、前記〈演劇研究会〉に〈近松学会〉を加えた関西系の学者の動向に期せずして接近した方法論を探りながらも、第一章に於て近松の「辞世文」を前に置いて、「中世の色彩を脱却し、解放的感覚をもった演劇的世界を確立することで、人間性の解放を主体的に歌いあげようとした」(一四頁)と説く著者の論は、近松を、「庶民の立場にたつて、近世芸能を最初に典型化して行った所に、現代にたつらなる過渡的な作者としての意義をみとめる」(森修氏「近松門左衛門」)立場と較べた際自ずと懸隔を生じて了っている。それは一方で、本書の中核をなす作品論で、「曾根崎心中」の構成を「極めて単純である」とし、後の心中物との比較に於て「未完成な試み」という視点から九兵次の登場を「行為において悲劇化するための」(二二二頁)素材であるとす論が、素材の重層性拒否―単層描写の方法を以て、それが未完成な試みたることを是認しつつも、そこに「曾根崎心中」的定型の意義を見出し、「曾根崎心中」的素材類型としての後続世話物が副主題設定という趣向性に逆行する所に近世演劇の挫折をみる松田修氏の方法論(『日本近世文学の成立』所収論文)とは、全く極北に位置する議論となつてもいるのである。今後の課題としてこの二書をどう発展させるかという問題がある。次に「近松の芸能論」の論の展開では加賀掾―近松―義太夫と辿る方法がみられるが、これは加賀掾の「竹子集」序跋文と「義太夫段物集」序文との商量をへて「難波土産」発端への考察という論理を採ったとき、「伝奇作書」初篇の近松半二の言説から帰納する狂言作者の作者観が、近松門左衛門の「辞世文」への回帰によつて異なる解釈になることも予想されはすまいか。それは続く儒者の演劇観の考察にも例えば春台の「独語」などを無視した論旨が、「辞世文」をもう一度、「主体は義太夫にあり、彼が積極的に近松という作者を捉えて成功したということ。この場合義太夫節という節が主で、作は従であるということ。」(室木弥太郎氏「近松と古浄瑠璃」)なる観点からみなおす可能性を失くした点につながるように思う。しかし乍ら近松の曾我物に於ける加賀掾・義太夫両者の正本の考究は、歌舞伎狂言と相関わる研究方法によつて、著者が在来提唱して来た武道物と傾城物との分離をとおしての「時代武道物考」の理解を援ける研究として裨益されること多かった。

こまかな点をいくつか挙げれば、五二頁の「山科言継卿記」はその息の「言経卿記」とあるべきところ。作品年表のうち「出世景清」を貞享三年初演とする点では信多純一氏の二年初演説がやや有力となりつつあり一応の注記が欲しいし、「団扇曾我」の貞享四年

初演は元禄一三年宇治座初演説があり、「曾我五人兄弟」元禄一四年初演に關しては高野辰之・祐田善雄両氏に同一二年説がある。ところが加賀掾の曾我物に關わるだけに著者の見解がききたかった。一二六頁の表中「傾城反魂香」は竹本座初演の後改訂して宇治座上演となる筈だし、だとすれば加賀掾のための近松作品は更に検討の要がありはしないか。附属論文集の「近松と西鶴」では「諸国はなし」の「雲中の腕押」をひいているが、これは俳諧の付合を充分考慮せねばならぬ手法の問題と思われる。「技能雜芸滑稽ウツクシの類までしらぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ」た若輩の妄評である。もとより本書の価値を損なうものではない。(昭和四〇年六月三日講談社刊、A5判四二二頁英文一一頁附索引、三、二〇〇円)